

## 中国史研究と「史料」 趣旨説明

宮 崎 聖 明

(本学文学部史学・文化財学科准教授・中国史)

「史料」という語句にはさまざまな定義づけがなされるが、本講演においてはひとまず、「歴史学の研究・調査と叙述の基本となる根拠素材」と定義しておく。この「史料」は、狭い意味では文字で記録された情報（文字史料）を指すことが多いが、より広い意味では、遺跡から発見される装飾品・武器・生活道具などの出土品、また遺跡そのもの、さらには絵画・建造物や風俗・習慣・儀礼など、多種多様なものも含まれる。歴史の研究・叙述は、これら史料に基づいて行われる。歴史研究は史料なしには成立せず、史料は歴史学の根底を支えるもの、と言ってよかろう。

しかし、「史料に書かれていれば、それは疑いない歴史的事実だ」ということは断じてできない。史料は、過去の人々の記憶・記録に基づくものであるが、そこには誤りが無いとは断言できない。また、過去に起こった全ての出来事を漏らすことなく記録することは不可能である。加えて、史料が人の手により残されたものである以上、そこには史料を残した者の立場・考えが意図的に、あるいは無意識に反映されている。歴史学にたずさわる者は常に、史料が抱えるこうした問題と向き合いつつ、史料の妥当性・有用性を検討する「史料批判」という作業を行い、また史料が語らない部分について、状況証拠や合理的判断、常識などによる補足を行いつつ、歴史叙述を行っている。

本講演は、講演者が専門とする中国史を題材とし、史料の背後にある「意図」を読むことの重要性を説く試みである。歴史叙述の根拠となる史料の扱い方を通じて、歴史研究に臨む姿勢のようなものを感じ取ってもらえれば、企画者としては喜ばしい限りである。